

bunka@ryukyushimpo.co.jp
TEL 098-865-5162

文化

沈黙に向き合う 沖繩戦聞き取り47年

石原 昌家

2008年3月16日、沖前の05年のことだった。真摯靖国神社合祀取消裁判が、料調査には豊島緑大学院生と同伴といふべき安良城来(この日こそ、1879年、明治國家に琉球併せさせられ、同化・皇民化されてきた琉球人の末裔が日本政府・靖国神社に敢然と立ち向かった、歴史的瞬間だった。

歴史修正主義を正す①①

靖国合祀取消求め提訴

沖繩戦の史実歪曲を批判

には琉球併合で組み込まれた天皇制を拒絶する意思表示であった。また、同じ靖国合祀取消裁判をおこなっている韓国、さらには台湾原住民の遺族のみならず、アジア平和共同体を求め運動に連動するという長期的な展望の素地も形成されていった。

靖国神社とは

原告弁護士は「靖国神社は、天皇のために殉じた者を神として祀る特殊な宗教団体であり、非民主的・反平和的な性格を特徴とする特異な政治性と歴史観を有する宗教団体である」「このような性格を有する靖国神社が、沖繩戦の戦没者を

5人の原告

提起し、原告と弁護団、裁判支援者グループは、久高島へ泊り込みで参加した。そのうえ、地元新聞社の記者2人も学習会に参加していたのは、報道に側もその問題を重視している表れた。私は受け止めた。なにしろ、新聞社に協力したのは遠慮なく、戦争被害住民の靖国神社合祀を「朗報」として報じてきていたので、記者の学習会への参加は、自社の報道内容を検証することに

提訴した日の琉球新報夕刊(2008年3月19日付)は「合祀取り消し求め提訴」(県内遺族、靖国と国相手・那覇地裁)の見出しのもと、以下のように提訴内容を伝えている。「沖繩戦で亡くなった肉親を無断で靖国神社に合祀され、追悼の自由を侵害されたなどとして、県内の遺族5人が同神社に合祀の取り消しなどを求め、十九日午後、那覇地裁に提訴する。同様の訴訟は東京、大阪地裁でも

主婦が「軍属」扱い

その記事の翌日、同紙朝刊(3月20日付)では「合祀取り消し求め提訴」(県内遺族、靖国と国相手・那覇地裁)の見出しのもと、リード記事に「『母は日本軍に殺されたのに、積極的に軍に協力したと位置付けられている。これほどの侮辱はない』。原告の崎原盛秀さん(母の母)は、(五)「当時、米軍の艦砲射撃が雨のように降り注ぐ中、日本軍にガマを追い出され、艦砲の破片が直撃し即死した。崎原さんは昨年、自ら同神社に問い合わせたので、その新装改訂版だ(次回は12月掲載)」

5人の原告の一人金城実彫刻家に、「1970年から沖繩戦体験聞き取りしてきた研究者として、天皇の軍隊に殺されたなど生存者の思いを国と靖国神社にぶつけるので、専門家証人になるように」とい

ることができたのは幸いだった。必然的にそれとセットの提議法の実態を明らかに出すことになることだった。

英霊として合祀すること、合同学習会も開催した。専門家証人としての私も当然訴訟は東京、大阪地裁でも

ながら、襟を正してそれを受け止めた。そして、ただちに沖繩の靖国神社合祀と関連の資料調査研究に取り組みだしたのが、提訴3年

10人の社会派原告弁護団(地宮城紀夫団長)の精力のかつ緻密な弁論によって裁判は展開していった。

靖国神社へ合祀の取消を求めるとは、思想的根柢

合祀取り消し求め提訴

県内遺族、靖国と国相手

那覇地裁

沖繩戦で亡くなった肉親を無断で靖国神社に合祀され、追悼の自由を侵害されたなどとして、県内の遺族5人が同神社に合祀の取り

原告は、ひめゆり学徒隊として慰霊された被爆者遺族、自衛隊、外務省、父兄が遺族、学友の母や、父兄が遺族、等とて、前年、戦没者合祀をめぐり、区に宛てられていた形勢家の命取れ、更

提訴は、ひめゆり学徒隊として慰霊された被爆者遺族、自衛隊、外務省、父兄が遺族、学友の母や、父兄が遺族、等とて、前年、戦没者合祀をめぐり、区に宛てられていた形勢家の命取れ、更

提訴は、ひめゆり学徒隊として慰霊された被爆者遺族、自衛隊、外務省、父兄が遺族、学友の母や、父兄が遺族、等とて、前年、戦没者合祀をめぐり、区に宛てられていた形勢家の命取れ、更

●沖繩靖国訴訟の提訴を報じる「琉球新報」2008年3月19日付夕刊●同3月20日付朝刊

殺され、なせ殉国死



沖繩戦犠牲者の合祀批判

●沖繩靖国訴訟の提訴を報じる「琉球新報」2008年3月19日付夕刊●同3月20日付朝刊